

【特集】シンポジウム 戦後日本の労働者像——歴史・経営・文化

特集にあたって

鈴木 貴宇

はじめに——シンポジウムの記録に代えて

本特集は、2024年12月23日に開催した国際シンポジウム「戦後日本の労働者像：歴史・経営・文化」（於早稲田大学国際会議場、図1）での基調講演（アンドルー・ゴードン：ハーバード大学）と3名の報告者（榎一江：法政大学大原社会問題研究所、清水剛：東京大学、坪井秀人：早稲田大学）による研究発表を記録したものである。報告者のうち、榎、清水の両氏は鈴木が代表を務めた科研費プロジェクト「戦後日本における労働者像の生成と文化に関する総合的研究：サラリーマンの社会文化史」の分担研究者であり、2022年から3年間、共同研究を行った⁽¹⁾。最終年度に開催した本シンポジウムの第一の目的は共同研究の成果を世に問うことにあったが、結果として研究の掉尾を飾るにふさわしい内容のものとなったと考えている。研究代表者の任にあった者が振り返りをこうした達成感をもって行うことは、自画自賛との失笑の対象かもしれない。しかし、これはひとえにシンポジウム当日に登壇した4名の研究報告と、開催までに大原社会問題研究所（以下、研究所）のスタッフはじめ、多くの人たちから受けた有形無形のサポートの功績である。シンポジウムの内容については本特集を読者諸氏にご高覧願うことで判断を委ね、ここでは主にシンポジウムの関連企画として実施した労働運動ポスター展示について、その反響と課題を記すことで本特集の背景を共有したい。

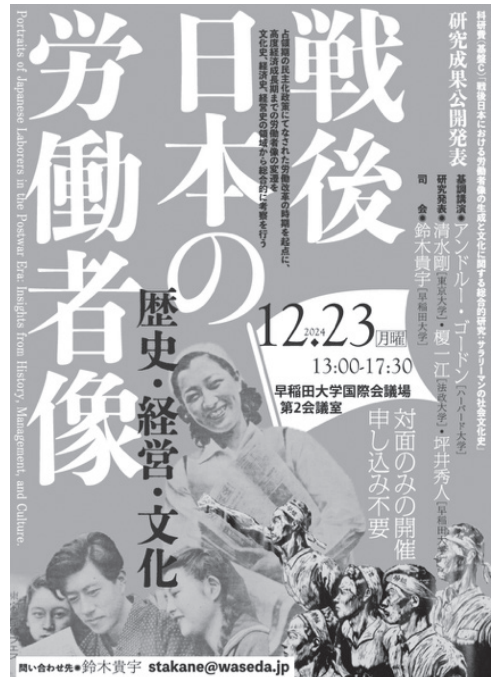


図1 シンポジウム用チラシ
(作成：文学通信)

(1) 本特集に先行して2025年2月の『大原社会問題研究所雑誌』（第796号）で組んだ特集「戦後日本の労働者像」に収録の論稿も、本科研による共同研究の成果である。併せて参照されたい。

展示企画「響けわれらが声」について⁽²⁾

(1) 経緯から開催まで

前述の通り、本特集の基は科研費でのプロジェクトにあるが、その出発点は戦後日本社会において「労働」および「労働者像」がどのように語られ、また象^{かたど}られることになったのかを可視化させることにあった。ここで「可視化」を強調した理由は、それが修辭的な意味ではなく、あくまでも実践としての試みであったからだ。「労働」という概念は社会科学の領域で扱われることが多いものの、実際にはこの世に生まれ、社会との関わりを持つためには誰もが避けて通ることのできない営為でもある。ゆえに「労働」について考えることは限りなく「生活」の様態を考えることに近接するはずだが、実社会で展開されたときの様相を把握するにはどういった方法が効果的なのだろうか。やや生硬かつ未熟な問いかもしれないが、科研費での共同研究を企画したときにあった核心はこの疑問だった。それは私が日本近代文学を研究対象とするうちに、文学作品には日本社会とそこに生きた人々が近代化をどのように経験し、その中に生起した希望や絶望が反映されていると考えられるようになり、個人的なものとも見える感受性を社会状況との呼応関係として読み解く方法を模索することでもあった。本シンポジウムの副題が「歴史・経営・文化」となっているのは、科研の研究メンバー各自の研究領域（歴史：榎，経営：清水，文化：鈴木）を示すと同時に、この3点から「労働」を照射することで、「労働」が社会的に表象されたときの「労働者像」を支える下部構造も浮かび上がらすことができるのではないか、という企図ゆえでもある。

しかし、当然ながら「可視化」を実践するために言語の力だけでは抽象的にすぎる。そこで、本シンポジウムと併行して広義の労働運動に関するポスター展示も企画した⁽³⁾。研究所所蔵のポスター5,500点の中から、戦後に作成された2,800点をほぼ悉皆調査し、本特集の意図を視覚的に伝えるポスター35点を榎，清水，鈴木の3人で選定した。会場ではポスターのほか、研究所が所蔵

- (2) 展示で使用したポスターは、大原社会問題研究所（以下、研究所）のホームページで公開を予定しているため、ここでは内容には触れず、本特集と関連のある部分と展示の反響について述べる。
- (3) 歴史資料を展示するときにポスターをはじめとするエフェメラ（ephemera）、すなわち公的資料ではない写真や雑誌といった一過性の資料が持つ力と可能性については、今回のシンポジウムのように学際的な共同研究の場において、さらに検討されて然るべきだと感じている。本科研のポスター展示のきっかけとなった過去の展示について、ここで言及しておきたい。一つはメリーランド大学プランゲ文庫（The Gordon W. Prange Collection, Maryland University）が2009年に開催した展示“Voices of the Vanquished: Censored Print Publications from Postwar Japan, 1945-1949”である。GHQ占領期の検閲文章および図書で知られる同文庫によるこの展示は、ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（邦訳：岩波書店、2001年）を題材として、同文庫の所蔵資料で「占領体験」を再現したものである。もう一つは、ドイツ歴史博物館（Deutsches Historisches Museum）が戦後70年を記念して開催した展示“1945: Defeat. Liberation. New Beginning”である。これは敗戦国ドイツからの視点のみならず、12のヨーロッパ諸国が「戦争終結」をどのように経験したのかを一般人の所有になる残留品（衣服や食器といった生活雑貨から、写真など）から浮かび上がらせたものだった。最後に、早稲田大学に拠点を置く20世紀メディア研究所が2016年に開催した展示「雑誌に見る占領期——福島鑄郎コレクションをひらく」である。これは在野の研究者だった福島氏の収集した雑誌資料を題材に、占領期日本の言説空間を考察したものである。これらの展示を経験したことで、生活の中から生まれる一過性の資料を展示空間に供する際には、研究者の歴史認識が不可欠なことを実感し、科研費プロジェクトでは「シンポジウム」と「展示」のアウトプットどちらも必須のものとして設計した。

する近江絹糸争議の記録映像（『立ち上がる女子労働者』、1954年）、労組の文化活動の一環で撮影された写真群のライド動画、また大阪産業労働資料館（エル・ライブラリー）の協力による戦後林業労働者を撮影した写真のライドショーといった構成で、展示「響けわれらが声」（於東京大学駒場博物館、早稲田大学ワセダギャラリー：期間は駒場が2025年2月1日から24日、早稲田が3月7日から29日までの開催であった。図2）を開催することができた⁽⁴⁾。

(2) 反響と課題——本特集との関連において

約2ヶ月にわたる展示の反響は予想以上に大きなものだった⁽⁵⁾。開催にあたり全面的に東京大学駒場博物館のスタッフの方々からの協力を得ることができたため、いわば展示のプロの助けを受けたわけだが、それでも限られた広報と「労働運動」というテーマ、さらに大学施設という条件では、実際のところどれだけ一般の関心をひくことができるのか心許ない中でのスタートだった。しかしこうした心配は幸いなことに杞憂に終わった。展示を通じて、見えてきた課題を本特集に収録の論稿との関連で以下に挙げる。

シンポジウムと展示を併行して開催したことの成果で最も大きかったものは、まさに科研プロジェクトが目的とした「労働者像」を「可視化」することの意義と可能性だった。基調講演でゴードンは自身のこれまでの研究を総括し、その妥当性と有効性を確認した上で、日本の労働史をジェンダー、特に女性労働の観点から再考する余地について述べている。この問題意識は、ゴードンが展示に寄せて執筆した解説を参照することで、より輪郭が明瞭となるだろう。以下に関連箇所を引用する。

私にとって、ここで厳選されたポスター資料が興味深いのは、私が考えるところの「貫戦期」日本から「戦後」日本への転換を示す点にあります。「貫戦期」とは、1920年代から1950年代の約30年間を指し、戦争と敗戦という明白な断絶があったにもかかわらず、社会構造や政治経済、そして本展示とも関連の深い社会運動において、重要な連続性が指摘できる時期のことです。具体的に言えば、本展示で紹介されるポスターのうち、1940年代から60年代までのものは、同研究所が所蔵する戦前のポスターとの共通点が顕著です。このことは、戦闘的な労働者や階級闘争を象徴的に描く、といった視覚的な表現にとどまらず、日本の労働組合が提起した要求の性質についても言うことができるでしょう。今回の展示でも説明されているように、生産から消費へと時代の重点が移り、労働者像が中流階級の「サラリーマン」や働く女性へと変わるにつれ、熾烈を極めた階級闘争の熱が冷めていく様



図2 展示用チラシ
(作成：文学通信)

(4) 来場者数は駒場で938人、早稲田では770人、合計1,708人である。本展示の実現は折茂克哉氏（東京大学駒場博物館）のキュレーションとサポートなしには不可能だった。ここで改めて謝意を伝えたい。

(5) 展示についての詳細および来場者より寄せられたアンケートについても、研究所のホームページで公開する際に紹介したいと考えている。

子がわかります⁽⁶⁾。

敗戦に起点を置く従来の戦後史観ではなく、ここでゴードンの指摘する「貫戦期 transwar」史観を導入することで、本特集に収録した各報告の要諦も明快となる。女性労働の実態とその歴史的叙述のズレを指摘する榎の報告「働く女性の歴史をめぐる」は、高度成長期以降に完成した「男性稼ぎ手モデル」が、戦時下の1930年代に形成された補助的、一時的存在としての女性労働者像と結びつき、「労働者の妻」という性別に決定された役割の固定化をあぶりだす。

戦後の労使協調路線と相携えて進行した労働者のサラリーマン（＝会社人間）化に焦点を当てた清水の報告『「サラリーマン」像と『主婦』像の変容——会社との関係を中心に』は、私生活までもが「会社」に組み込まれていくことで「働く夫」と「支える妻」という構造が規範化していく過程を描き出す。男性稼ぎ手モデルは社会的必然ではなく、榎の言う「女性労働の忘却」により導き出された構築物にすぎないことが強調される。

榎、清水の報告は、いずれも戦後日本の労働をめぐる社会意識が「家族」へと集約され、均質化へ向かう様態を明らかにするが、それは言い換えれば人々の生が「役割」という型に包摂されていく状態の分析でもある。そのとき社会的役割からはみ出してしまう「個」の主体とその表現はどのように行われてきたのか。戦後文学という大きな流れの中でサークル詩運動を考察した坪井の報告「労働者が書くこと——1950年代サークル文学論のために」は、いわば「地下水脈」として存在した「個」の表現を探り出し、均質化に抗う生の実践を現代にまで問いかける。

「労働」が生きるための営為である以上、そこには他者との協働ふくめ、自らが声を発し、それを届け、相手からの声を受け取り、そしてまた返す、という作業も要求される。本特集の目的を可視化した展示タイトルが「響けわれらが声」と、ややドラマティックなものとなった理由も、戦後日本社会を生きた人々の「声」を労働の実践の中から拾い集めるためだった。そこで聞き取られた声に対し、現在に生きる私たちはどのように応答するのか、はたして自発的に声を出しているのか、この問いとともに本特集を届けたい。

（すずき・たかね 早稲田大学文学学術院教授）

謝辞：本プロジェクトを進めるにあたり、次にお名前を挙げる方々からのサポートは不可欠でした。折茂克哉さん、ジェンキンス加奈さん、倉敷伸子さん、佐藤洋一さん、渡邊未帆さん、谷合佳代子さんとエル・ライブラリーのスタッフの皆さん、そして20世紀メディア研究所の皆さん、ありがとうございました。

附記：本プロジェクトはJSPS 科研費（課題番号：22K01842）の助成を受けたものである。

(6) アンドルー・ゴードン（鈴木貴宇訳）『「響けわれらが声」展示開催に寄せて』。この文章でゴードンはマサチューセッツ工科大学（MIT）でジョン・ダワーが中心となったオンライン・プロジェクト“Visualizing Cultures”（文化を可視化する）に言及しており、その中でデジタル・ギャラリーとして研究所の所蔵する戦前ポスターをクリストファー・ガータイス（Christopher Gerteis）が解説つきで紹介していることに触れている。本文で用いた「可視化」も、ここで言われる Visualizing の試みと同種と言えるだろう。同プロジェクトについては以下の URL を参照されたい。https://visualizingcultures.mit.edu/protest_interwar_japan/index.html